

医療従事者の疾病構造

天野松男 ((財) 健和会)

◆はじめに 医療従事者の疾病構造を調べたので報告する。

◆資料と方法 某医療機関共済組合の「健康保険傷病手当金請求書」を集計した。集計年次は 90 年～96 年で、同じ疾病で請求が複数回に及んでいるものは 1 件の請求としてまとめた。疾病分類は ICD10 の大分類による。

◆結果・考察 90 年～96 年の観察数は男 1319 人年、女 4678 人年であった。性・職種別の総病休日数、1 件当たり病休日数、発生率を下図に示す。男の総病休日数では、筋骨格系、消化器系、感染症等が多かったが、1 件当たりの病休日数では新生物、発生率では呼吸器系が大きかった。うち、事務系職員は消化器系、感染症、呼吸器の病休日数が多く、1 件当たりの病休日数は新生物、発生率は呼吸器系が大き

I	感染症
II	新生物
III	血液
IV	内分泌
V	精神/行動障害
VI	神経系
VII	目
VIII	耳
IX	循環器系
X	呼吸器系
XI	消化器系
XII	皮膚
XIII	筋骨格系
XIV	泌尿器系
XV	妊娠/分娩
XVII	先天奇形
XVIII	症状その他
XIX	損傷外因
Total	全疾病

った。女では、筋骨格系、妊娠/分娩、新生物の総病休日数が大きかったが、1 件当たりの病休日数は新生物、精神/行動障害が長く、発生率では筋骨格系、妊娠/分娩の他に呼吸器系が高かった。女の中に占める看護婦の割合が高いので、看護婦の場合もこれに類似した傾向を示したが、精神/行動障害の病休日数が少ない傾向が観察された。女の看護婦と非看護婦の間の妊娠/分娩に関連する疾病休業の頻度および平均休業日数等には統計的有意差は認められなかったが、看護婦がやや大きい傾向があった。精神/行動障害で休業したもので業務に関連することが原因として記載されたものはそれ以外のものに比べると病休日数が長い傾向があった。

以上のような観察から、筋骨格系、妊娠/分娩、新生物、精神/行動の障害、呼吸器等の疾病に関連する対策の優先度が高いと考えられた。これらの疾病は人事、物理・化学的環境に影響されるので、その整備が必要と思われた。

◆まとめ 医療従事者の疾病構造を報告し、対策の優先度と整備すべき環境について述べた。

